

中国の吉祥図案と日本の吉祥図案の比較研究

尹 笑非（華東師範大学民俗学専攻院生） YIN Xiaofei

中国の吉祥観念は、長い歴史を持っている。『易・系辞下』には、「吉事有祥」とあり、すなわち、吉事があれば必ず祥がある。中国の吉祥図案は、民衆のいい生活への願いと望みを表している。中国の伝統的な吉祥図案は、種類が多く、内容がさまざまであり、その象徴とする意味は人々の生活のあらゆる面に及んでいる。民衆は自分の願望を図案で表すほか、その人生の経験、知恵と教訓をも図案に込めたのである。中国の伝統的な吉祥図案の多くは、諧音（漢字の発音が同じまたは近いこと）と象徴の手法が用いられ、四字俗語の形で表されており、絵画や彫刻などのさまざまな芸術分野で、建築、生活用品、服飾などの一部として使われている。その形式には、人物（たとえば財神や子宝を授ける観音など）をはじめ、動物（たとえば龍や鳥など）、植物（たとえば瓢箪や牡丹など）、用具（たとえば八宝や如意など）及び符号（たとえば太極や寿の字、雲などの紋様）がある。

日本で見た吉祥図案の中に、中国の多くの吉祥図案に大体当てはまるものがいくつかある。その中の一部は、ともに仏教の縁起物の影響によってできたものと思われる。たとえば、蓮の花である。これは日本でもよく使われている装飾紋様であるが、中国では、蓮の花は仏教以外の意味も持っている。その発音は「蓮」と同じで、よく桂花（モクセイ）と合わせて、「連生貴子」の図案を成している（「蓮」と「連」の発音は同じで、「桂」と「貴」の発音は同じなのである）。そして、「蓮」は「廉」と同じ発音をするほか、蓮花は泥から生まれながら清らかであり、高潔な性格を有しているとされる。それゆえ、清廉の意味が含まれる。たとえば、「一品清廉」という図案は、一輪の蓮の花から成されたものである。一品の高い官位を表すほか、清廉で公事を重んじる意味をも表している。

日本人々に好まれている吉祥図案に、中国から伝わってきたものも多くある。たとえば、亀、鶴、牡丹、「歳寒三友」の松竹梅などはこれである。しかし、筆者は日本で図案の意味を聞いたが、確かな答えを得ることは少なかった。たとえば、中国語では「蝠」

は「福」と同じ発音をするため、人々は同じ発音をする漢字の間に何らかの神秘的な関連があると信じ、「幸福」を「蝙蝠」で表すことはこの図案の意味となったのである。日本の装飾紋様でも、形が変わった蝙蝠が用いられているが、日本語の環境では、その本来の発音の対応関係がなくなる。ゆえに、蝙蝠は単なる装飾紋様に退化し、含まれていた文化的な意味は失ってしまった。一方、同じ発音に対して、日本の伝統観念の中にも、その独自の文化的体系があり、同じ発音によってできた禁忌が多く存在している。たとえば、日本人は数字の9を好んでいない。「9」は「苦」と同じ発音をしているためである。

日本では、日本特有の装飾紋様もかなり存在している。たとえば桜の花、扇、車輪などの紋様はこれである。扇は、中国の文化体系においても、日本の文化体系においても、あおいで暑気をおさめ、また火をあおる実用品としての効用のほか、芸術品ともみなされ、時には身分と品位の象徴にもなっている。しかし、日本のいくつかの芸術分野、たとえば能楽の演技の中では、扇はいつも必須の道具として脇に刺し、時々何らかのものを表しており、また招きや打撃、踊りなどの動作をする時の道具として使われている。これらの事例から、扇は日本の生活と芸術にとって欠かせない存在であることがわかる。それゆえ、人々に好まれていろんな装飾紋様で使われていると思われる。中国では、扇は縁起物としての象徴意味を持たず、中国の伝統吉祥図案の体系に入っていないのだ。（尹笑非氏は、2005年9月17日～9月30日訪問研究員として来日。）



中国年画「加官進禄（官位が昇進し禄が上がる）。右側の子供は冠をもち、「冠」で「官」を意味し、左側の子供は鹿に寄りかかり、「鹿」で「禄」を表す。その身に纏っている服装にも、菊、竹、盤長（中国結びのような紋様）の紋様が見られる。



日本の能楽役者の服装に見られる扇紋。